様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　3 月　31 日現在

機関番号：３３９１７
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2012
課題番号：２０５２０６００
研究課題名（和文）　台湾先住民と「帝国」日本
－植民地帝国形成期から崩壊期にかけての通史的考察－
研究課題名（英文）　Taiwanese aborigines and imperial state of Japan

研究代表者
松田　京子（MATSUDA KYOKO）
南山大学・人文学部・教授
研究者番号：20283707

研究成果の概要（和文）：日本による植民地統治下の台湾において、圧倒的なマイノリティであった台湾先住民に関する統治政策の特徴を、「五箇年事業理蕃事業」、台湾先住民の「内地」観光、霧社事件の影響といった具体的な事項の分析を通じて通史的に考察し、その結果、台湾先住民に対する統治政策と人種主義思想との関連性、および植民地支配への学知の関与のあり方とその変化について明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The feature of the government policy about the Taiwan Aborigines in colonial Taiwan was considered through analysis of concrete matters. As a result, it clarified about the relevance of the government policy and racism thought to the Taiwan Aborigines and about the way that should be and change of participation of the discourse to colonial rule.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
２００９年度	600,000	180,000	780,000
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
２０１２年度	600,000	180,000	780,000
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：日本近現代史　文化交流史
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：台湾先住民　表象　学知　植民地主義　人種主義　五箇年計画理蕃事業

１．研究開始当初の背景

近年、日本近代史の分野で、「帝国」としての日本という観点から「植民地研究」は活発化している。日本帝国初の本格的植民地であった台湾についても、その例外ではなく、台湾における植民地支配の問題を、台湾という「場」のみに限定することなく、「帝国」日本の広がりの中で考察していこうとする研究が展開されてきた。そのような研究関心は、政治史、経済史的な研究成果を重要な基盤としながらも、思想史・文化史的な関心にも広がっている。特に、最近では「植民地近代」をめぐる問題として、日本－台湾の研究者の意見交換が活発に行われ、大きな成果をあげてきたというのが、最近の研究状況だといえよう。

本研究も、このような研究潮流の上に立つものであるが、しかし先行研究では、優れた

例外はあるものの、その多くが、被植民者としては　漢民族系住民を対象として研究が展開されてきた。しかし本研究は、植民地台湾において、人口数的にも社会的にも圧倒的なマイノリティであった台湾先住民に焦点をあてて、上述のような考察を行っていく。このことによって、植民地主義の暴力性・矛盾が先鋭的にあらわれた台湾先住民政策という地点から、日本「帝国」の植民地政策の性質を改めて問い直すことが可能になるという見通しをもっている。また、当該期の日本「内地」の植民地認識とその鏡としての帝国意識のあり方に、人口数的な割合からいえば想定できないほど、強いインパクトを与えたといわれる台湾先住民像の解明を通じて、帝国意識研究の深化に寄与することができると考える。

また本研究に至るまでに、研究代表者松田京子は、帝国意識という観点から日本「帝国」の諸相を明らかにするという問題設定のもと、具体的には 19 世紀から 20 世紀への世紀転換期における帝国意識の形成過程の解明という課題で研究を進め、2003 年に著書『帝国の視線』を刊行した。その後、考察対象時期を 1930 年代に移し、当該期の日本「帝国」の膨張とそれに伴う植民地支配様式の転換という問題が、日本「内地」の帝国意識のあり方と、どのように影響し合うのかを、植民地台湾、特に台湾先住民をめぐる諸問題に焦点をあてて考察し、その成果を、論文「「一九三〇年代の台湾原住民をめぐる統治実践と表象戦略」(『日本史研究』第 510 号)、「『風景地』の思想－帝国の拡大と国立公園」(『日本文化の人類学／異文化の民俗学』、法蔵館) などとしてまとめるとともに、国際シンポジウム「殖民時期現代化的真相」論壇や、社会思想史学会・2005 年度大会、日本思想史学会・2006 年度大会などでの口頭発表を通じて公表してきた。これらの研究を通じて、植民地統治実践と帝国意識の相互関連性、および統治実践とそれが植民地社会に与えた影響については、日本「帝国」の形成期から崩壊期までを見通した形で、時期ごとの変化という側面に留意しながら通史的に考察することの必要性を痛感した。その意味で、本研究は、研究代表者のこれまでの研究をさらに発展させ、総括的にまとめる研究と位置付けることができる。

２．研究の目的

本研究は、植民地台湾、中でも植民地社会において圧倒的なマイノリティであった台湾先住民に焦点をあてて、近代日本の植民地統治のあり方の推移と、それが植民地社会に与えた影響、および日本「内地」の特に社会意識のあり方に与えた影響を、日本「帝国」の形成期から崩壊期（植民地の側からみれば脱植民地期）まで、つまり 19 世紀末から 1950 年代というタイムスパンの中で、考察することを目的とするものである。

３．研究の方法

先に述べた研究目的を達成するため、台湾先住民政策史研究の通説的な時期区分に従い、それぞれの時期において具体的な課題を設定し、関連する文献資料の調査・収集とその分析を主な方法として考察をすすめた。具体的な課題としたのは、次のとおりである。

(1) 植民地台湾での先住民政策史において、第 1 期とされる 1895 年から 1914 年に焦点をあて、当該期において、先住民社会に最大の影響を与えた「五箇年計画理蕃事業」についての考察を第 1 の課題とした。「五箇年計画理蕃事業」とは、台湾先住民に、植民地政府への絶対服従か「死」かの選択を強いた、大規模な「討伐」・服従化政策であった。ここで具体的な解明に目指したのは、①このような政策立案の背景にある植民地統治思想と、植民地官僚の台湾先住民認識のあり方、②「五箇年計画理蕃事業」の具体的な実践の様相、③この軍事行動に動員された日本軍兵士を媒体として日本「内地」に流布された台湾先住民像と帝国意識の関連、④この政策が台湾先住民社会に与えた影響、以上の四点である。

(2) 次に、台湾先住民政策史において、第２期とされる 1915 年から 1930 年に焦点をあて、「五箇年計画理蕃事業」のような大規模な軍事力による服従化政策が一応、終結した後に、本格的に実施されていくことになる台湾先住民有力者への懐柔・教化政策、その中でも、教化政策の代表的なものである「内地」観光政策について考察することを課題とした。またそこから派生して 1930 年代における「内地」観光政策の変容にも注目し、特に日本統治下で「先覚者」と呼ばれた先住民知識人層の動向にも焦点をあてた。

(3) さらに 1930 年に起こった霧社事件とその影響について考察することを第３の課題とした。霧社事件は、それまでの台湾先住民統治のあり方について植民地政府への転換をせまった事件として位置付けられており、台湾先住民政策史研究においては、この事件以降 1937 年までを第３期としている。霧社事件については、優れた先行研究も多数存在するが、ここでは、特に霧社事件の情報に接した他の台湾先

住民の行動から、台湾先住民社会にとっての霧社事件の意味を解明することを具体的な課題とした。

４．研究成果

(1)「五箇年計画理蕃事業」について、特に人種主義思想との関連で考察した。その結果、次の点を明らかにした。

①台湾先住民に関する人類学的な観点からの調査活動は、日本による台湾領有直後から展開されていき、その結果として台湾先住民内部に様々な分類線が引かれていったこと。

②また 1907 年から本格的に行われる「五箇年計画理蕃事業」の実施と前後して、日本人および漢民族系台湾住民を「蒙古人種」とし、台湾先住民を「馬来人種」とする言説が流布していくこととなるが、そのような言説の背景には、支配者である日本人と台湾先住民との差異の強調という側面とともに、被支配者内部の切断という政治的な意図が込められていたこと。

③植民地住民の国籍問題との関連で、台湾先住民を法的人格としては認めないとする言説が実行力を持っていく過程を分析した上で、警察と軍隊による徹底的な武力鎮圧作戦である「五箇年計画理蕃事業」とは、台湾先住民について、(生物学的な意味での)「ヒト」であることを否定するような強烈な人種主義的思考に基づくものであったこと。

(2)「五箇年計画理蕃事業」が台湾で実施されていた時期に、日本「内地」で台湾先住民がどのような形で表象され意味付けられていくのかを、特に拓殖博覧会（1912 年に東京で開催）に焦点をあてて考察し、一面では台湾先住民を「脅威」として描きながらも、最終的には「文明」による「教化」という文脈で把握しようとしたのが当該期の台湾先住民表象の特徴であり、そのような表象行為に人類学的な知見が大きな影響を与えたことを明らかにした。

(3)「五箇年計画理蕃事業」による「討伐」作戦が激しい戦闘を伴って展開されたタロコ渓谷一帯に焦点をあてて、この場所の「意味」と「記憶」が、植民地支配下の台湾先住民政策との関連で、どのように変化していくのかを考察し、植民地統治者の側の「台湾先住民に対する討伐作戦の記念の地」という意味づけと、先住民の側の「植民地支配に対する抵抗の場」という「記憶」、そして戦後の国民党政権による意味づけが、複雑に交錯していくことを明らかにした。

(4) 台湾先住民に対する「内地」観光政策について、日本による台湾領有初期から 1930 年代さらに総力戦期にかけて、その性格がどのように変化していくのかを考察し、次の点を明らかにした。

①1897 年の第１回「内地」観光実施の段階から、台湾先住民の知識欲、とりわけ農業に関する関心は強いものであったが、「内地」観光の内容は彼らの希望に沿うものではなく、教化政策として実施された「内地」観光が、かえって植民地政府への不信感を増幅させる結果となったこと。

②その上で、1930 年代以降の「内地」観光は、農村視察が中心となることで、郷土の生活改善のための知識を得ようとする台湾先住民の期待にある程度応えるものになり、「内地」の人々との実質的な交流が生じたが、一方で、台湾先住民が自らの文化を否定していく契機となり、それは「山地」の「内地化」という当時の台湾先住民政策を強力に支える経験でもあったこと。

(5) 1930 年の霧社事件とその影響の考察から、霧社事件以降、植民地政府による台湾先住民政策は、「生活改善」の名のもと、台湾先住民の生活の細部まで規制しようとする「蕃地」の「内地化」政策が中心となったことを明らかにし、さらにその政策の内容は台湾先住民の規律・訓練化という側面を多々含むものであり、その後の総力戦体制下での台湾先住民の軍事動員の基盤ともなった点を明らかにした。

(6) 霧社事件以降の台湾先住民社会の変化について、特に日常生活と「伝統文化」の変容という観点から考察を行い、次の点を明らかにした。

①「蕃地」の「内地化」政策によって台湾先住民社会は大きな変容を被ることとなるが、そのような中で台湾先住民の「伝統文化」を保護しようとする動きが、尾崎秀真、佐藤文一をはじめとした在台日本人の中から生じたこと。

②そのような「伝統文化」保護の動きは、植民地台湾でのツーリズムの展開とも深い関係をもつこと。

③植民地台湾における台湾先住民の「伝統文化」保護の動向は、同時期の日本「内地」における日本美術史、日本文化史研究にも一定の影響を与えたこと。

以上のような研究成果を踏まえて、本研究課題全体の考察を、特に植民地支配に関する「学知」の関わりの変遷と、人種主義的思考の変容という観点から行い、植民地支配開始直後の法学・経済学・人類学・歴史学といっ

た分野を中心とする学知の関与から、時期が下がるにつれて、美術・音楽・芸術学・美学といった分野も含めた広範な学知が関わるようになっていく傾向について論じた上で、各時期の人種主義の特徴を分析し、一書としてまとめて公刊するための準備をすすめた。

植民地統治下の台湾先住民に関する歴史学的な手法での研究は、教育史の分野をはじめ少ないながらも優れた研究が発表されているが、管見の限りでは、本研究成果のように、台湾先住民の統治政策史を思想や学知、文化との関連で通史的に論じたものはほとんどない。その意味で本研究成果は、当該分野における先駆的な研究であり、日本および東アジア、特に台湾での研究状況に一定のインパクトを与えることが期待される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①松田京子、「内地」観光という統治技法－1897 年の台湾原住民の「内地」観光をめぐってー、アカデミア人文・自然科学編、査読無し、第 5 号、2013、pp. 85-103

②松田京子、人間の「展示」と植民地表象－1912 年拓殖博覧会を中心にー、南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告、査読無し、第 1 冊、2011、pp. 167-182

③松田京子、植民地統治下の台湾原住民をめぐる「分類」の思考と統治実践、歴史学研究、査読無し、第 846 号、2008、pp. 99－107 頁

〔学会発表〕（計９件）

①松田京子、帝国の思想－台湾原住民と植民地主義、開放的台湾史読書会、2013 年 3 月 1 日、人性空間（台湾・台北市）

②松田京子、台湾原住民の「内地」観光と宗主国日本－「宗主国－植民地の絡み合う経験」をめぐって、日本台湾学会第 14 回学術大会、2012 年 5 月 26 日、一橋大学（日本・国立市）

③松田京子、台湾原住民と「内地」観光政策－第１回「内地」観光を中心にー、開放的台湾史読書会、2012 年 4 月 6 日、人性空間（台湾・台北市）

④松田京子、「原始芸術」言説と時間認識－台湾原住民の「固有文化」をめぐる言説の展開－、日本台湾学会台北支部例会、2012 年 3 月 3 日、国立台北教育大学（台湾・台北市）

⑤松田京子、「風景地」の思想と台湾国立公園－1930 年代を中心にー、中央研究院台湾史研究所文化史研究群研究会、2012 年 2 月 24 日、中央研究院（台湾・台北市）

⑥松田京子、「原始芸術」言説と台湾原住民－「始まり」の語りと植民地主義、日本台湾学会関西部会研究大会、2012 年 1 月 28 日、関西大学（日本・吹田市）

⑦松田京子、「風景」の意味と記憶－台湾原住民と国立公園－、国際ワークショップ「現代中国の記憶の場」、2010 年 8 月 13 日、南京大学（中国・南京市）

⑧松田京子、「帝国」の拡大と台湾国立公園－1930 年代の台湾における「山地」と台湾原住民－、空間形成研究会、2009 年 12 月 14 日、立命館大学（日本・京都市）

⑨松田京子、植民地統治下の台湾原住民をめぐる「分類」の思考と統治実践、2008 年度歴史学研究会大会、2008 年 5 月 18 日、早稲田大学（日本・東京都）

〔図書〕（計１件）

①加藤隆浩編、『ことばと国家のインターフェイス』、行路社、2012、全 373 頁（松田京子、第３章「原始芸術」言説と台湾原住民－「始まり」の語りと植民地主義、pp. 55－73）

６．研究組織

(1)研究代表者
松田　京子（MATSUDA KYOKO）
南山大学・人文学部・教授
研究者番号：20283707

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：